

# 東北の素材とかたちの研究

## その1／大館の曲げわっぱ

### A study on Materials and Thier Forms from North Eastern Japan.

— Case study 1 : Magewappa wood craft of Odate.

鈴木 敏彦

SUZUKI Toshihiko

日原もとこ

HIHARA Motoko

斉藤さだむ

SAITO Sadamu

TOHOKU Region ( North Eastern area of Japan) is known for both their materials and the high levels of craftsmanship, these skills have been shared within the community for a number of years. The constant advances made in both the development of materials and technologies is creating a growing and rich foundation. In such unique circumstances, we are researching and developing new concepts for design that is focused on the use of materials through craftsmanship.

For the first project, we would like to introduce "MAGEWAPPA of ODATE" in the main chapter.

This project is subsidised by The Japan Architectural Education and Information Center in 2001 and by Tohoku University of Art and Design in 2002.

---

## はじめに

東北の地には、先人より継承された素材や技術が数多く存在している。また、新しい素材や技術の開発もその下地の上に開花しつつある。このような地において「東北の素材と形」について、素材をデザインするという姿勢を基本としたものづくりについて研究する。単に伝統的技術の調査に終わらず、素材の特性や価値を社会、文化、歴史などあらゆる視点で模索し、素材本来の姿を開発、育成するデザイン活動を行うこともひとつの研究になり得るだろう。また、ものづくりに携わる職人やメーカー、地場産業としての街などとのコラボレーションにより、「わざ」が創造する素材の可能性を最大限デザインに繋げていくことを目的とすべきと考える。さらに「素材のもつ潜在的な造形性や、様々な異素材との連携や融合、使い込まれていくことで成熟する素材のエイジング性、環境システムを先導していく素材の社会的責任などを、デザインという枠組の中で可能な限り追究していくことを目的とする。

本論では、その1として「大館の曲げわっぱ」について述べる。尚、本研究は平成13年度建築技術教育普及基金助成および平成14年度東北芸術工科大学特別研究助成を受けている。

## 1. 調査・研究の方法と期待される効果

まず、調査研究の実施方法としては、

第1段階：東北地方に存在するポテンシャルのある地場産業の発掘、訪問、実態調査にもとづく現状分析と今後の展望。この際、研究の性格上、写真家の協力が不可欠となる。方法としては、

- 1) 情報収集、研究対象地場産業のリストアップ。
- 2) 地場産業への訪問、実態調査のお願い。
- 3) 研究対象の選定と訪問、実態調査。
- 4) 調査結果の分析と今後の展望。

第2段階：今後の展望にもとづく具体的なデザインの提案。

地場産業の素材・技術を有効活用するようなデザイン提案を行ない、将来的なヴィジョンを構築する。潜在的な可能性を目に見える形で表現する。

調査・研究の実施により期待される効果としては、東北の地に埋没している極めてポテンシャルの高い素材や技術を掘り起こし、デザインという視点から再評価することによって、素材や技術の新しい方向性が開発・育成され、地場産業としての街などとのコラボレーションに繋がることにより地域・社会全体が活性化されることが期待される。

## 2. 第一段階（調査・研究対象の選定と実施）

研究の第一段階として平成13年3月に、曲げわっぱ、ブナコ、そしてこぎん刺しを調査した。曲げわっぱについては秋田県大館市の柴田慶信商店、ブナコについては青森県弘前市のブナコ漆器製造株式会社、そしてこぎん刺しについては弘前こぎん研究所を訪ねた。それぞれの工房において、熟練の職人が製作する過程を写真家が分解写真として切り取っていった。写真家は、目に見える世界の向こうにある職人の息づかいや技に迫り、工房に差し込む光や、釜から立ち上がる湯気や様々な工具や機械の佇む空気感までも写し取ろうとする。被写体である職人は写真家の注文に嫌な顔一つせず応える。まさに、熟

練の職人の余裕と貫禄を感じた瞬間であった。改めて敬意と感謝を表したい。

### （1）曲げわっぱ（柴田慶信商店）

#### 1) 曲げわっぱの歴史

曲げわっぱの歴史は非常に古く、奈良時代にさかのぼり、きこりが杉柁で曲物の器を作ったことが始まりとされている。関ヶ原の役後、豊臣方に味方した水戸藩主佐竹侯は領内の豊富な秋田杉に着目し、家中の窮状を救うために下級武士の副業として曲げワッパの製作を推奨した。また原木の搬出には、農民に年貢米借出代替として山から城下までの運搬をさせた。現在の大館市常盤木町は昔「お足軽町」と称され、作られた曲物は人馬や能代によって酒田、新潟、関東に運ばれた。このようにして江戸時代末期から近代にかけて職人により技術は受け継がれてきたが、プラスチック製品の普及により、他産業への転向が相次ぎ曲物の生産は激減する。だが現在の本物志向の風潮により、大館の曲げわっぱの技術は見直されている。

#### 2) 曲げわっぱの特徴

原材料は樹齢200年以上の天然秋田杉で、柁目が綺麗で筋のない中ほどのドーナツ状の部分だけを使用する。この天然秋田杉は柁目と香りが冴え、木目が真直ぐで弾力に富んでいる。細かく均等で年輪のそろった木目は、鮮紅色又は淡黄色で軽さと明るさを感じさせる。またこの優美な木目が生かされた製品には、シンプルな味わいと気品が表れている。しかし、東北森林管理局の発表によると、天然秋田杉は平成19年には枯渇すると言われており、曲げわっぱの製品は貴重なものとなると言える。

### 3) 曲げワッパの製造工程

#### 1. 製材

天然秋田杉を手割り又は製材により薄く剥ぐ。

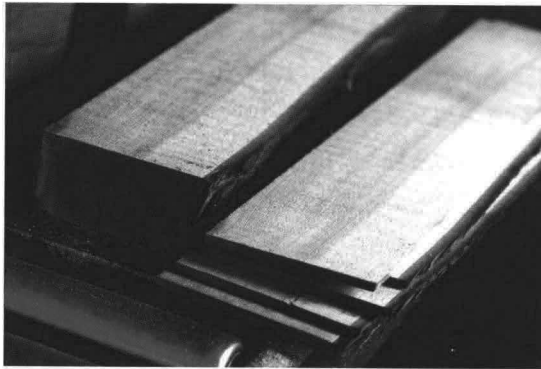


写真1



写真2

#### 2. 煮沸

一晩水に漬けた後、熱湯で3～5分煮沸すると適度に樹脂が溶けて折れにくくなる。



写真3

#### 3. 曲げ加工

ゴロと呼ばれる丸太で板を巻き込み丸みをつける。  
ゴロには製品のサイズ、形ごとに多くの種類がある。



写真4



写真5

#### 4. 乾燥、接着

およそ2昼夜の間乾燥させる。その後表板の両端をつま取りする。表板の裏に接着剤を付け、3～4時間木ばさみで固定する。



写真6

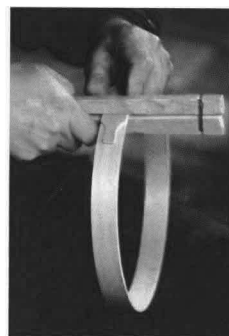


写真7

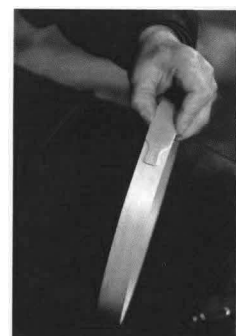


写真8

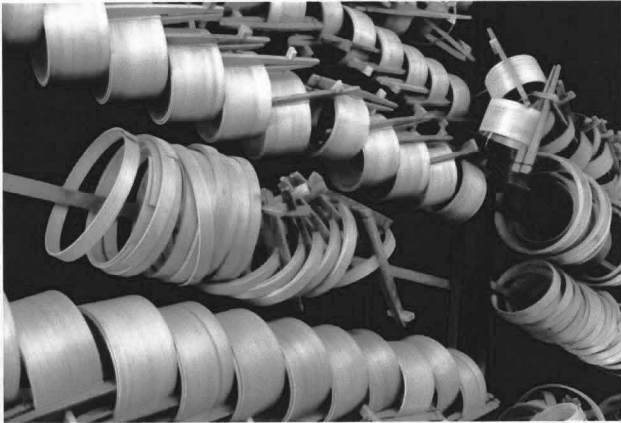


写真9

## 5. 桜皮とじ

先の平たいはりを使い、樺(なめした山桜の皮)で接合部を縫い留める。



写真10



写真11



写真12

## 6. 底入れ、仕上げ、塗り

カッターで底板の入る溝を作る。全行程の中で一番根気のいる作業である。底板をはめた後、当て板をしてまんべんなく叩く。生漆に延粉を混ぜて塗るさびつけの後、下地塗りと研ぎを繰り返し、最後に漆で上塗りをする。



写真13

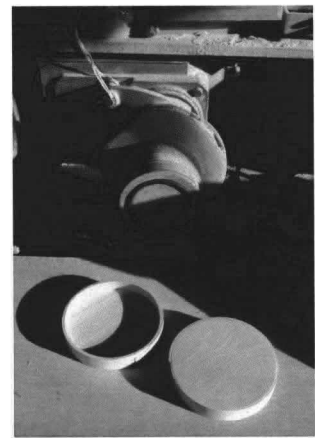


写真14

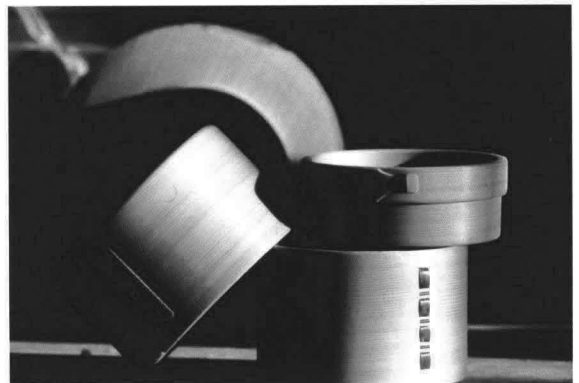


写真15

## (2) ブナコ (ブナコ漆器製造株式会社)

### 1) ブナコの歴史

ブナの木は木目が暴れて反ることから建築用の構造材や化粧材としての用途は少なく、りんご箱に使用されるなど山林のブナの木は邪魔者として扱われてきた。戦後、漆器類の輸出が急増しコストや耐久性、またデザイン面で見直しされるようになると、それに伴い青森県でもブナの木は見直されるようになる。そして昭和31年、新技術の開発により津軽塗りの素地としてブナコは誕生する。

ブナの木は八甲田山系、白神山地をはじめ県内各地に分布し、青森県では蓄積量日本一を誇る。欧米では、その木質の美しさから「森の聖母」と呼ばれている。ブナコはその県産ブナ材を素材とし、巻き重ねて押し出し整形するというユニークな製法でひとつひとつ丁寧に手作りされた工芸品である。現在ではブナの産地である白神山地が世界遺産に指定されブナの入手が激減し、貴重な伝統工芸品となる。

### 2) ブナコの特徴

#### 1 木材資源を大切にする。

ブナコの製法は、従来の木工技術である木の固まりから削り出して作る挽きものとは違い、材料に無駄がなく木材資源を有効に活用できる。

#### 2 デザイン

挽きものなど従来の木工技術では難しい多様な形状を表現することができ巻き重ねた模様は年輪を思わせる美しさである。

#### 3 高い品質と安全性

割れ、ゆがみがなく海外など気候風土の異なる場所でも使うことができる。また耐水性に優れたコーティングは食器として使うことができ、アルコール系中性洗剤で洗うことも可能である。

### 3) ブナコの製造方法

- 1 ブナの原木を厚さ1mm、長さ2mの薄板にし、その後10mm厚のテープ状にカットする。

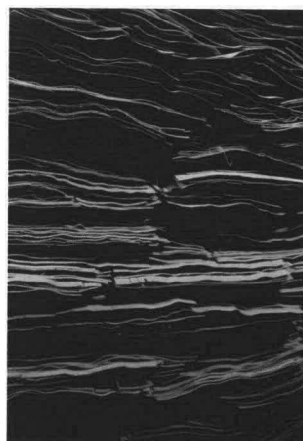


写真 16



写真 17

- 2 テープ状のブナ材を芯となる板を軸としてコイル状に巻き重ねる。



写真 18

- 3 コイル状になった板から湯呑み茶碗のカーブを使って プナコの製品  
て押し出すことにより成型していく。



写真 19

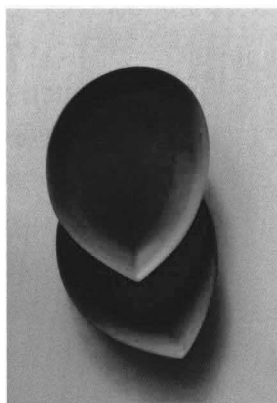


写真 23



写真 20

- 4 木地の接着後塗装工程に入り、乾燥と塗装が繰り返  
し行われ完成する。

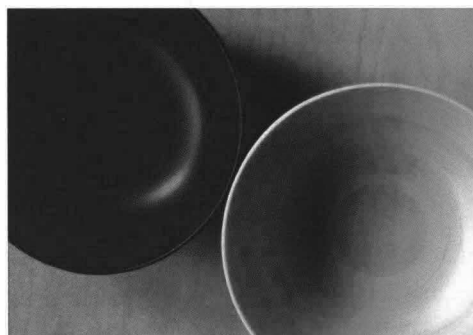


写真 24



写真 21

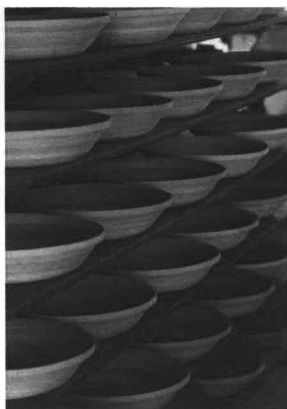


写真 22

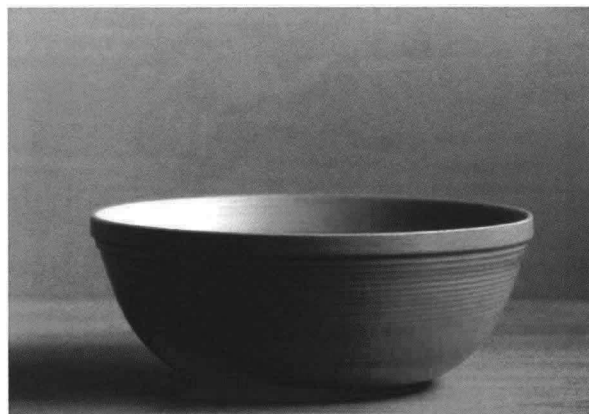


写真 25

### (3) こぎん刺し (弘前こぎん研究所)

#### 1) こぎん刺しの歴史

こぎん刺しの始まりはあまり定かではなく、後の天明8年に書かれた奥民図集にはほぼ完成されていたと言われている。当時、津軽地方は綿布を造る気候には適さず、また厳しい自然と藩政の中、農民達は贅沢禁止令により絹を着ることを禁止されていた。自生する麻で造られた着物や古着を着ることを強要される中で、農民達は麻で造られた着物の補強と保温のために、麻糸で布目を拾うようになったのがこぎん刺しの始まりである。後に、僅かに手に入る綿糸で刺すようになり、それが主流となる。こぎん刺しは親から子へ、また娘達が競い合い、日常着として生活の中に溶け込んでいく。しかし気の遠くなるような手間は、文明とともに明治期後半には衰退の一途を辿っていくことになる。その後、昭和初期に柳宗悦らの民芸運動によりデザイン的、技術的に高い評価を受け今日までこぎん刺しは守られ続けている。しかし現在、このこぎん刺しの技術のほとんどは主婦の内職によって守られている。古作こぎんの魅力を今日に蘇生するためには、こぎん刺しの技術の普及など量と質の両面からの拡大が必要であり、こぎん生産を産業として一定の規模に拡大させ、民衆工芸品としての地位を確立することがこれからの課題となっている。

#### 2) こぎん刺しの特徴

こぎん刺しの特徴は、藍染めの麻布に白い木面で目にそって手刺しするもので、今日では用途によってウール地なども取り入れられている。また、模様を確実に刺すために方眼目のグラフ用紙の上に綿をいれた設計図が使われている。こぎん刺しは造られた場所により大きく三つの種類に分けられる。

##### 1 西こぎん

弘前市の西側、西目屋村、相馬村、弘前市船沢、小沢地区。山に入って重い荷物を背負うため、肩に縞模様の特徴がある。白と黒の糸で交互に五段の縞があることから縞こぎんとも呼ばれる。麻布の緻密さに合わせ、細かく様々な模様が入って手間がかかるので晴れ着に使われる。

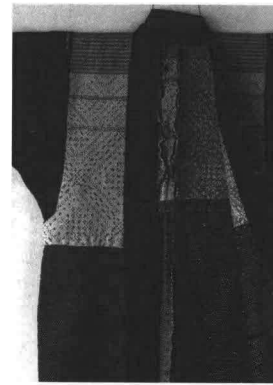


写真 26

##### 2 東こぎん

東側、黒石市、尾上町、平賀町、弘前市石川地区。太めの麻糸で織られた布に刺したものが多い。模様は縞がなく、全体的に大胆で大柄なものが多い。

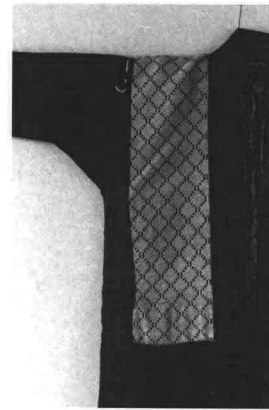


写真 27

##### 3 三縞こぎん

金木町、木造町、車力村。鮮やかで太い三筋の縞模様が入っている。デザイン的に優れたものが多いが存在するものが少なく大変貴重なものである。

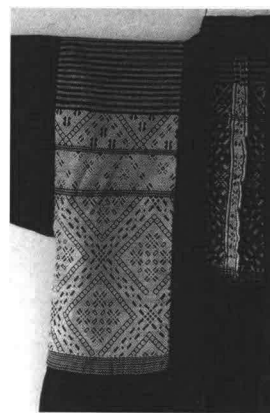


写真 28



### 3) こぎん刺しの工程

- 1 糸より
- 2 染める
- 3 織る

整計（長さを決める）／おがけ（糸がくまないように綾という棒を所々に立てる）／おまき／そうこう（金か竹の「おさ」に一本一本通す）



写真 29



写真 30



写真 31

### 4 整える



写真 32

### 5 裁断

### 6 刺し



写真 33

### 7 仕上げ

### 4) パターン

津軽こぎんの特徴は、より直線的で24通りの基礎模様からなる。パターンは四角形、三角形、菱形などがありこの組み合わせによって見事な装飾美がつくり出される。

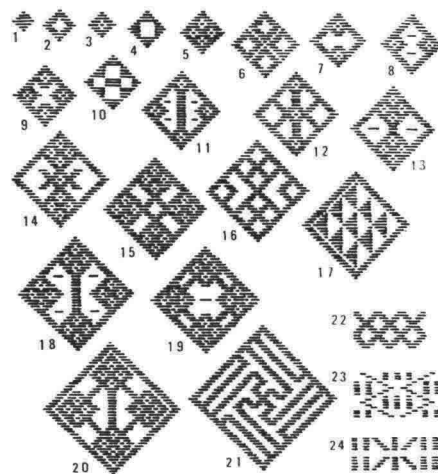


図1 こぎんの基礎模様

1 カチャラズ 2 マメコ 3 ハナコ 4 イシダタミ 5 ムスビバラ 6 四枚菱 7 シマダ刺 8 フクベ 9 コマクラ刺 10 ウロコ形 11 フクベ 12 猫の足 13 猫のマナグ 14 テコナ 15 ヤスコ刺 16 マメコの四つコゴリ 17 ウロコ形 18 クルビカラ 19 ペコ刺 20 ウマのクツワ 21 サヤ形 22 マメコ連 23、24 竹の節



### 3. 第二段階（曲げわっぱへのデザイン提案）

第二段階は、その対象を「大館の曲げわっぱ」に絞り込み、平成14年8月、大館の柴田慶喜商店にデザイン提案を持ち込むことから始まった。伝統工芸士の柴田慶信氏とのデザイン提案のモデルを前にしての様々なやりとりは、第一段階の調査よりもはるかに実践的な素材や技術についての多くを学ぶ機会となった。そして12月、最初の試作品が完成し、今度はその実物モデルを前にして、より詳細なデザインや製作上の問題点についての話し合い、最終調整をおこなった。そして今年、平成15年3月、ひとつの「素材」が「かたち」となった。新しい「かたち」は、杉を剥ぎ曲げるという根源的な加工技術によって生まれる円筒形状にアーチ形状をとりこみ、浮遊感を表現することによって現代的なイメージを提案している。ネーミングも「MAGEWAPPA」として新しいイメージを構築し、仕舞われていた伝統を現代の生活シーンに導くような試みとして位置付けている。主にお茶の道具として、水指／MIZUSASHI、菓子器／KASHIKI、重器／KASANEKI、そして盆／BONの4種類を商品として製作し、同年5月には、これらを持ってニューヨークのコンテンポラリー・ファニチャー・フェア(ICFF2003)に参加した。会場では、人集りができるほど盛況で、METROPOLISMAG.COMのLive@ ICFF 2003にSpecial Japanese Boxesとして紹介され、高い評価を得た。ここで得ることのできた多くの声を今後のデザイン開発に反映させていきたい。

地場産業の活性化という点からも、大館市から注目され、多くの新聞、テレビに紹介された。また、4～6月に行われたJRの東北キャンペーンポスターにもMAGEWAPPAが採用され、関東圏、関西圏においてJR列車内で、窓上の枠に掲出されることとなり、沈滞しつつある伝統産業に刺激を与えることができた。さらに、全国販売のインテリア誌等（新建築住宅特集7月号、MEMO男の部屋8月号、COMFORT 8月号）にも取り上げられたことは、若い世代に新しいイメージをアピールするという意味においても成功したと言えるだろう。

#### （1）第1回打ち合わせ（デザイン提案）

日時 2002年8月22日／場所 （株）柴田慶信商店 秋田

県大館市清水3丁目2-65-12／話し手 柴田昌正／出席者  
東北芸術工科大学 鈴木研究室（鈴木敏彦 千葉絢 伊藤伸 酒井聡 鈴木真理子 渡辺沙百合）

#### 1) 打ち合わせ内容

模型及びCGによって提案内容を説明した結果、器3についてはこの形態での製作は無理と告げられる。理由としては曲げに限界があり、木が割れてしまうということであった。その他の案については提案した模型をもとに試作することが決定した。

#### 2) デザイン提案内容

##### 1 照明1

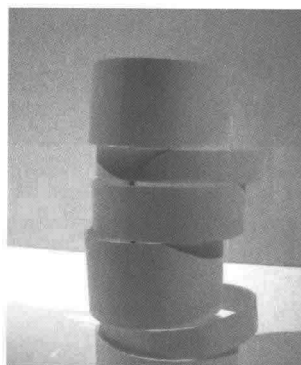


写真 34

##### 2 照明2



写真 35

##### 3 器1

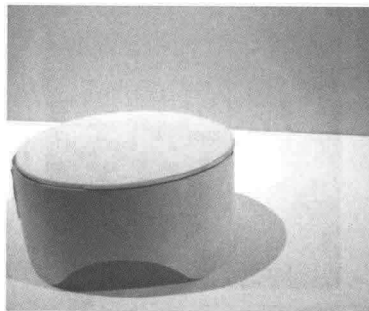


写真 36

#### 4 器2

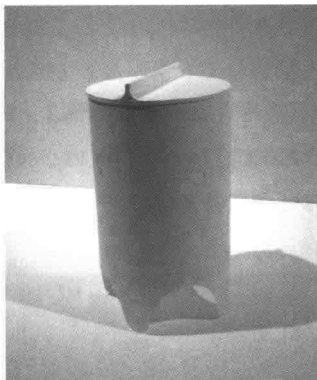


写真 37

#### 5 器3

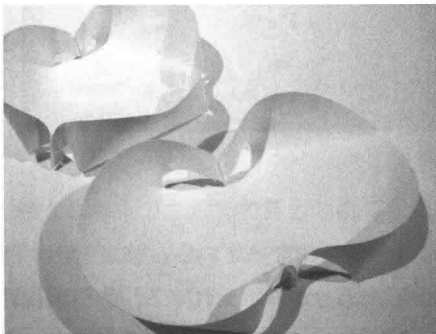


写真 38

### (2) 第2回打ち合わせ (インタビュー)

日時 2002年12月26日／場所 (株)柴田慶信商店 秋  
田県大館市清水3丁目2-65-12／話し手 柴田慶信・柴  
田昌正(親子)／出席者 東北芸術工科大学 鈴木研究  
室(鈴木敏彦 千葉絢 伊藤伸 酒井聡 鈴木真理子)

#### 1) 打ち合わせ内容

今回の打ち合わせでは、完成した試作をもとにデザインのディテールについて話し合った。その結果、照明の提案には無理があり、今回は器に限定して製作することが決定した。この段階でのデザイナーとつくり手とのやりとり、特に柴田氏の発言は非常に興味深いのでその模様を一部抜粋して以下に記録した。

#### 打ち合わせ光景

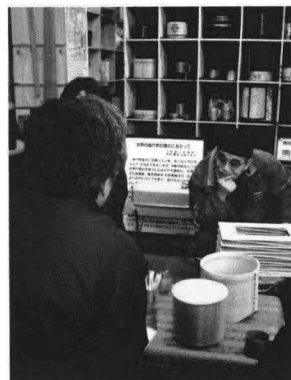


写真 39

柴田慶信(以下 柴):水指しは、材料の都合でその高さまでしかできない。作るとすれば、帯をつけて板を二枚つなぐしかない。平水指しは直径19寸。自分でこれが良い、と思っけていても家元が気に入らないと世には広まらないという世界がある。通常蓋ものはそういった形の物である。その形に特別な理由があるのか。

鈴木敏彦(以下 鈴):全体的につるつとしていた方が、少しモダンな感じがする。和風は和風だが、より現代的なイメージになるのではないか。

柴:その角度から言えば、一つの考え方としてはよいのかも知れない。

鈴:若い宗匠は新しい試みをしている。モダンな雰囲気を持った伝統的なものを作りたいと考えている。菓子器は低く、水指しはもっと高さが欲しい。

柴:物は高さがあると目に近づいて来てよく見えると言われているのですが(笑)。図面どおりにやってみる。

鈴:パネルの方は形態的に無理だと聞いた。

柴:私達の入っていく分野ではないのではないかと思います。杉では出来ない形態である。ひのきなら柔らかいのでできるかもしれないが(以後省略)。



写真 40

柴：水指しに関してはこの大きさの方が良いと思う。決まりごとの水指しがある。利休好み水指しですが。

鈴：（試作品と大きさを比較して）このくらい小ぶりでも良い。

柴：作品を何にするかという事を強調しなくてはならなくなってきた。この作品は仮に水指しと言う位置付けだが…。曲げ物の蓋は片手で開けてはいけない。大阪や京都ではそう言われている。東北では、取っ手をつけている物がほとんどだが。

鈴：自分は表千家だが、水指しを両手で開ける事はあまりない。菓子器ならあるが。

柴：（菓子器を持って来て）東北では取っ手をつけているが、取っ手をつけていると、ひっくり返した時に使えなくなる。という事を言われ驚いた。しかし、東北では取っ手が着いている物がほとんどである。

柴：実際に使ってもらう段階の事を考えるので、作り手はすぐ欠点を探してしまう。しかし、技術的には可能である。

鈴：構造的に一体ではないが、蓋の柂目に対して垂直の方が自然な感じがする。するっとした形がモダンな印象を与えられる。構造的には一緒だが、モダンな感じを出すようにそういうデザインにしている。一度お茶の先生に意見を仰ぎたい。宗匠等に意見を聞いてみるのが良い。

柴：あまり自然に逆らってもだめですね。蓋には逃げがないと落ちてしまう為に大きくしてある。持っていく時にすごく緊張してしまうためです。

鈴：（蓋の内側について）ぴったりという必要はないが、多少の逃げは必要である。



写真 41

柴（息子）：足は二枚板になっている。強度を出す為です。直に接合した部分から水もれする。底板が抜けたり、水もれを防ぐ為に二枚板になっています。

鈴：その方が良い。それにしても、この縞線がとてもきれいですね。

柴：杉は、風や日当たり、山に育つ条件によって違う。沢にある杉の木は成長が早いですが、目はとても粗い。その点、秋田杉は環境の厳しい所に育つので目が美しい。どんな作品でも秋田杉には勝てない。しかし、秋田杉は間もなく無くなってしまふ。普通の杉を使って作らなくてはならない。将来は漆の力を借りて作品を作っていきたい。

鈴：木が変わっても手間は同じなのか。

柴：むしろ手間が増える。曲げづらいため。秋田杉は多少刃が切れなくともきれいに切れるが、普通の杉は目彫りの様になってしまう。（原因は木目の細かさにあるようだ）

鈴：平成19年には無くなってしまふんですね。

柴：白太（白い年輪の部分）の部分が混ざっても良いのならもう少し作る事は可能かも知れない。

鈴：一般の人に観てもらったりと言う機会を設けたい。一度作ったからよいというのではなく、これからも継続して作品作りをしていきたい。

柴：その通りです。この一作品だけで終わりがたくな。後に続く様な考え方をしたい。

## 2) Interview（柴田親子への10の質問）

Q 1 柴田商店の歴史について。

A 父が歴史である。（息子談）全て父が独学でやって歴史をつくってきた。

Q 2 職人になってこれまで苦労したことなど。

A 弟子には就かず、全て独学でやってきたこと。伝統産業の中で独学としてやることでいじめられる。材料の供給が難しかった。

Q 3 曲げわっぱをつくる技術で今めざしていること。

A 古くて新しい、古いものが新しい逆戻りの仕事。使い手の要望に応じて作る。大館で曲げ物を見る館を作り、世界中の曲げ物を100点集めたら展覧会を開きたい。

Q 4 東京や海外での反応はどうか。

A 漆をぬったものと白木の作品のうち、白木の作品をドイツとフランスに持っていったが、どちらの国でも好評であった。

Q 5 秋田杉と他の素材との組み合わせについてどう考えているか。

A 金属と木材は合わないと思う。

Q 6 現代の生活においての曲げわっぱのあり方についてどう考えているか。

A 傷はつけていくものである。使うことによってできる傷を暮らしの足跡としてどんどん残し、使い込んでいってほしい。

Q 7 伝統工芸とデザイナーのコラボレーションが近年よく見られるが、それについてどう思うか。

A 目先を変えてくれるので必要なことである。職人の技術の展開の表現をデザイナーがしてくれる。人がモノに合わせるのではなく、人に合わせてモノを作る。

Q 8 世界には同じ曲げの技術を使ったものがたくさんある。それらからどういったことを学ぶことができるか。

A あかしやの木で出来た曲げ物は曲線が逆にできること、島根県の桑の木の曲げ物から、広葉樹と針葉樹の組み合わせのヒントを得るなど学ぶべきことは沢山ある。

Q 9 秋田杉は将来枯渇すると言われているが、代替の材料など、対策について何か考えているか。

A あと数年で枯渇する200年杉よりも白太部分の多い100年杉を使う。白太部分を生かしたデザインを考えていかなければならない。漆の力を借りる。針葉樹と広葉樹を組み合わせる。例えば桑、曲線が逆にできるあかしやを使って作る。依頼された仕事には何事も挑戦する精神を持つ。

Q10 将来曲げわっぱはどうあるべきだと考えているか。

A 宴、花見、儀礼の時など多くの機会に使ってもらいたい。作り手ではなく使い手によって広めていってほしい。その地域の伝統産業、一人の伝統技術よりも日本の曲げ物として捉える。

(3) MAGEWAPPA (最終完成品)

水指 MIZUSASHI

W175 D175 H180 / Japanese cedar / barks of cherry tree / natural finish / with lid / hand crafted

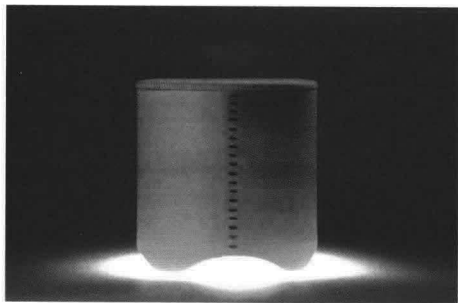


写真 42

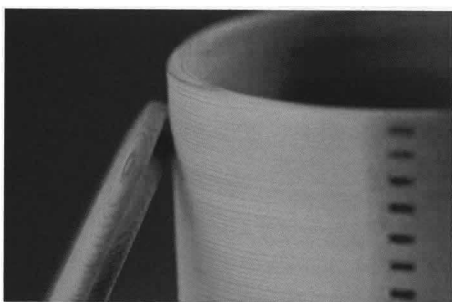


写真 43

重器 KASANEKI

W135 D135 H185 / Japanese cedar / barks of cherry tree / natural finish / 3 layers with a lid / hand crafted

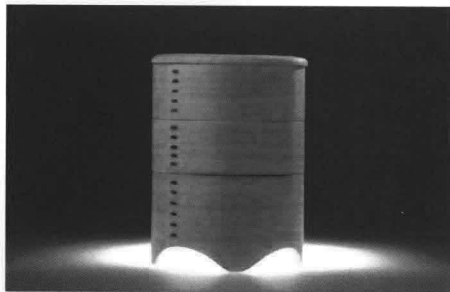


写真 46

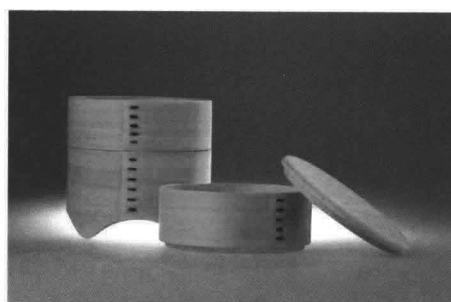


写真 47

菓子器 KASHIKI

W245 D245 H110 / Japanese cedar / barks of cherry tree / natural finish / with lid / hand crafted

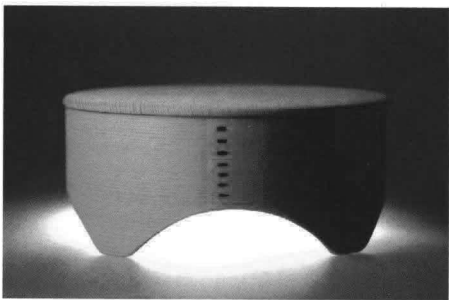


写真 44

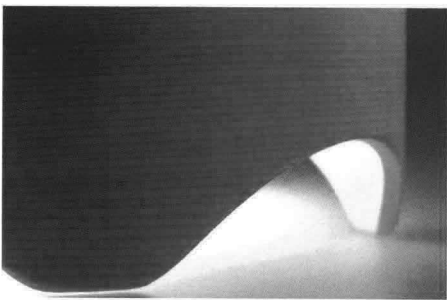


写真 45

盆 BON

W210 D210 H55 / Japanese cedar / barks of cherry tree / natural finish / stackable / hand crafted

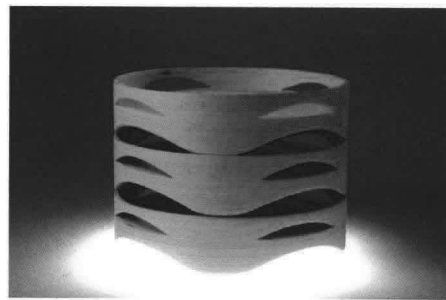


写真 48

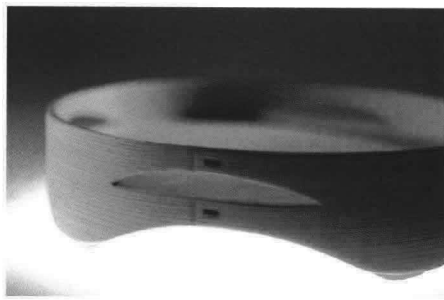


写真 49

(4) ニューヨークのコンテンポラリー・ファニチャー・フェア (ICFF2003)

以下 ICFF2003 の公式紹介文

The 15th. annual International Contemporary Furniture Fair (ICFF) draw the design world to New York City's Jacob K. Javits Convention Center Saturday, May 17 Tuesday, May 20, 2003. The yearly furniture fest is the U.S. premier event for contemporary design.



写真 50

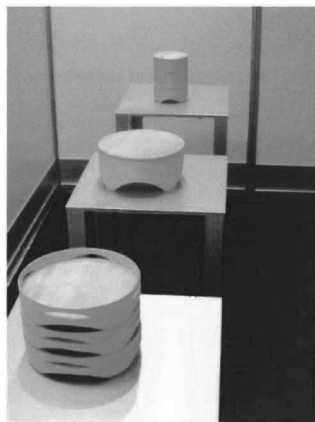


写真 51

WAG.COM

DESCRIPTION ARTISTS CURRENT HOUR EVENTS CONFERENCES DESIGNAWARD STOCKSTORE SEARCH/ABOUTS AD INFO

### Live@ICFF 2003 Special Japanese Boxes

By Shigeru Morano, Metropolitan Writer  
Live@ICFF 2003's Conference

The stackable, handmade, cylindrical boxes designed by Japanese architect Toshiko Suzuki and crafted by Yoshimasa and Yoshinori Shibata are exquisite examples of the country's traditional craftwork (which is in danger of extinction for lack of younger practitioners).

Made from Japanese cedar, the cylindrical boxes feature classical Japanese designs with the addition of a number of voluptuous swags added by Suzuki. The ends of each cylinder are then delicately sewn together using strips of cherry bark and naturally finished, allowing the wood to speak for itself.

Product: Hipsboxes  
Crafted by: Yoshimasa and Yoshinori Shibata, Tokyo  
Designer: Toshiko Suzuki  
Material: Japanese cedar and cherry tree bark  
Photo by: Shigeru Morano



写真 52

(5) 東北キャンペーンポスター

「その伝統に、新しい曲面が見えてきました。」

このポスターは、JRグループ（北海道から九州までの旅客6社）の共同宣伝ポスターで、4～6月に行われた「北東北デスティネーションキャンペーン」一連の宣伝ポスターの1種として、首都圏および関西圏のJR列車内で、窓上の枠に掲出されたものです。

サイズ：B3ダブルサイズ（W1030×H364）

掲出場所：上記のとおり

掲出期間：5月30日（木）～6月2日（月）（首都圏）



写真 53



写真 54

## (6) 掲載誌

新建築住宅特集 2003年7月号

「東北の素材とかたちに関する研究から  
ふたつのプロダクツが誕生」



写真 55

Memo 2003年8月号

「東北の伝統工芸から生まれたプロダクト」



写真 56

CONFORT 2003年8月号

「伝統の重みと  
現代的なフォルムが生み出した新たな曲げわっぱ」



写真 57

## 4. おわりに

「大館の曲げわっぱ」の材料である、樹齢200年以上の天然秋田杉は平成19年に完全に枯渇し、その後は大きくずれて、樹齢100年程度になるとのことである。美しい柃目の目の詰まった素材だからこその質感と品質。その素材の力なくしては、伝統の「わざ」をもってしてもそこに達することは容易くはないだろう。しかし、考え方によっては高級な伝統工芸から、日常に長く使えるプロダクトとしての新しい出発点となれるのではないか。そのときにこそ、「素材」と「わざ」に加えて、デザインという「かたち」が真に求められる。

## 執筆者

鈴木 敏彦 SUZUKI Toshihiko	デザイン工学部 生産デザイン学科 Faculty of Design/Department of Production Design 助教授 Associate Professor
日原もとこ HIHARA Motoko	デザイン工学部 生産デザイン学科 Faculty of Design/Department of Production Design 教授 Professor
斉藤さだむ SAITO Sadamu	WORKSHOP S + A 主宰 Photographer



## 水指 MIZUSASHI

W175 D175 H180 / Japanese cedar / barks of cherry tree / natural finish / with lid / hand crafted

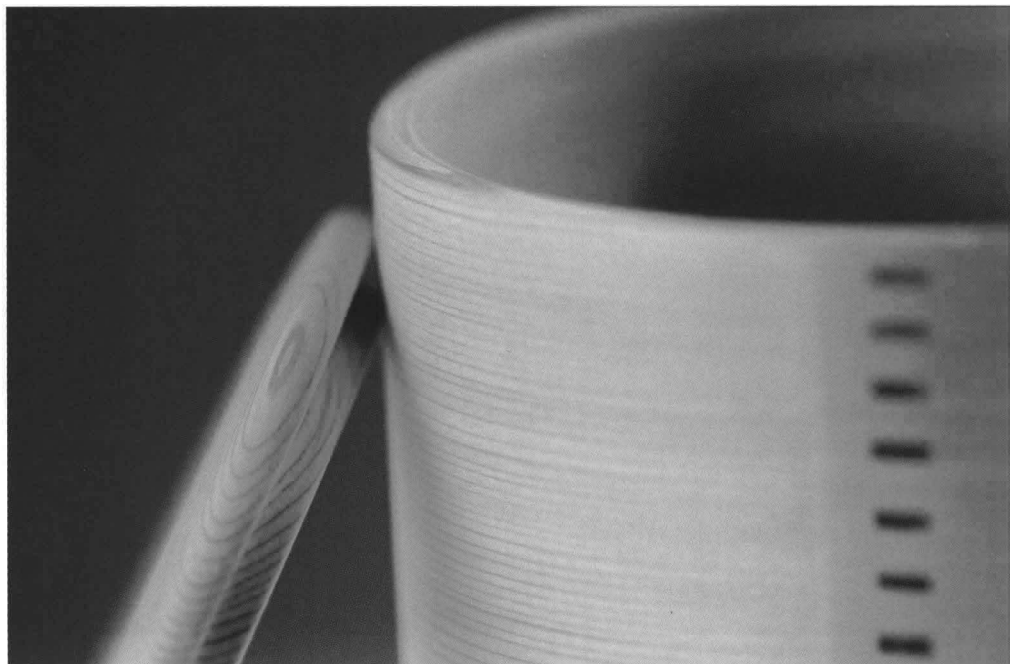
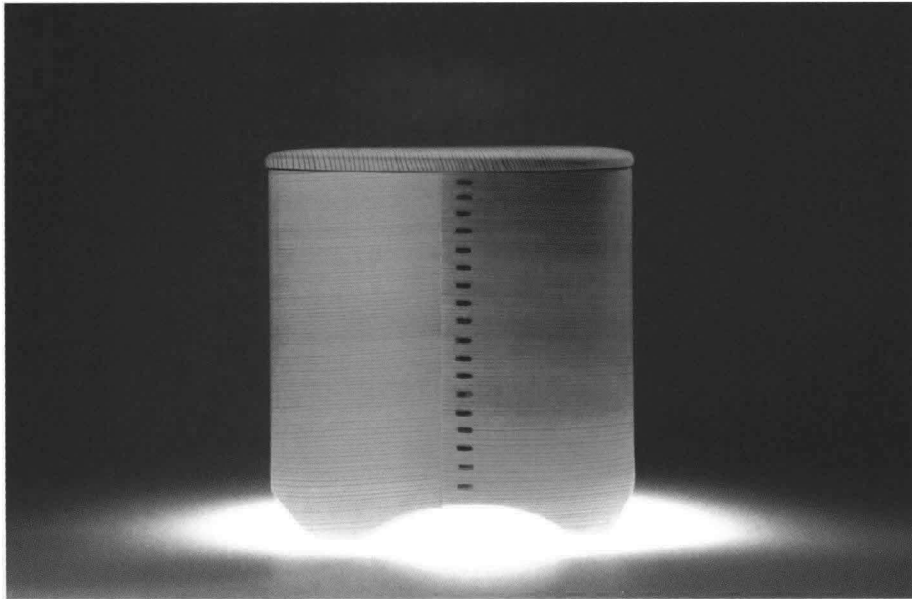


photo by Kenji KURATA

## 菓子器 KASHIKI

W245 D245 H110 / Japanese cedar / barks of cherry tree / natural finish / with lid / hand crafted

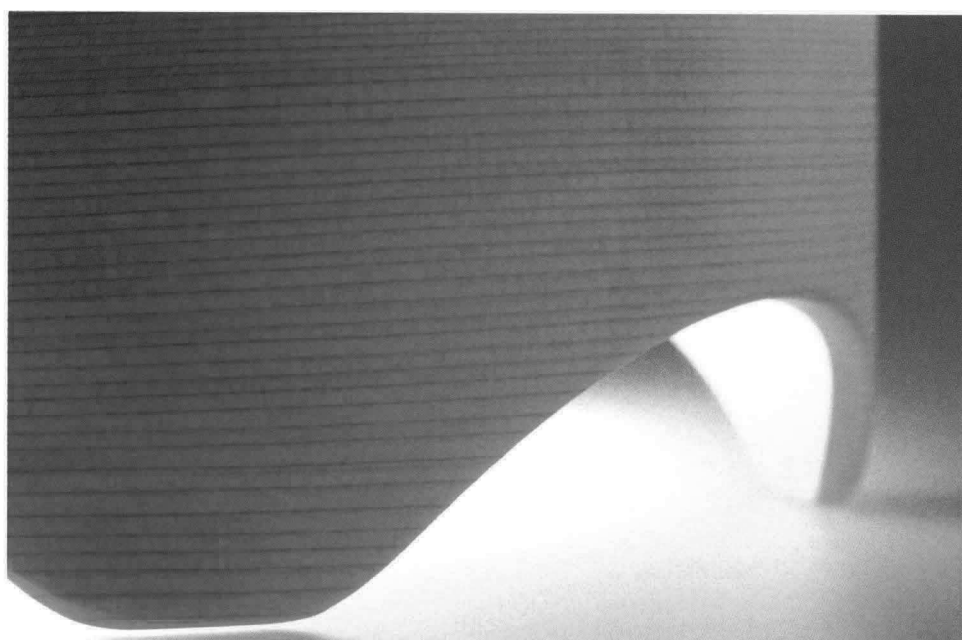


photo by Kenji KURATA

## 重器 KASANEKI

W135 D135 H185 / Japanese cedar / barks of cherry tree / natural finish / 3 layers with a lid / hand crafted

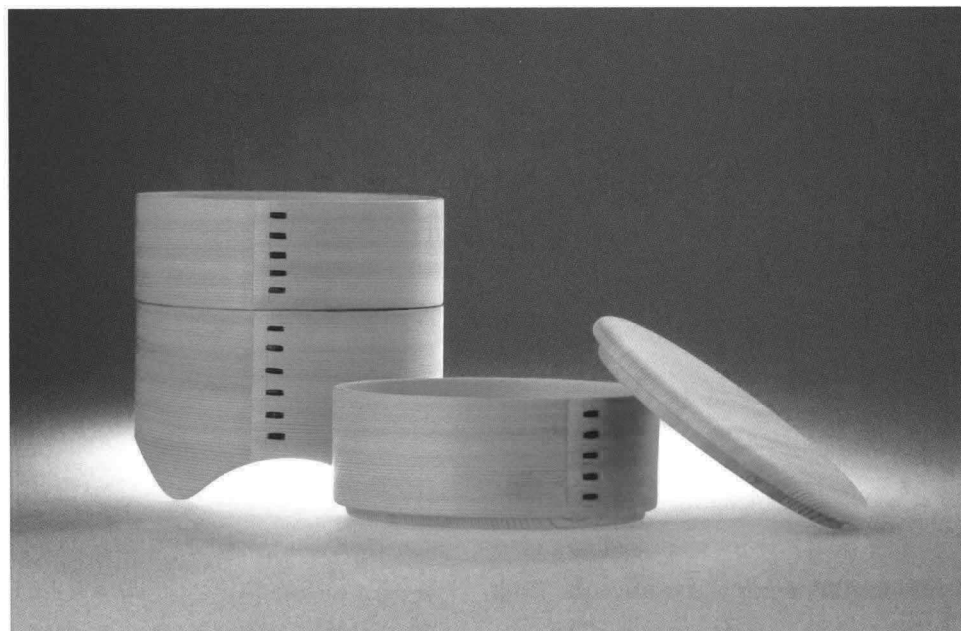
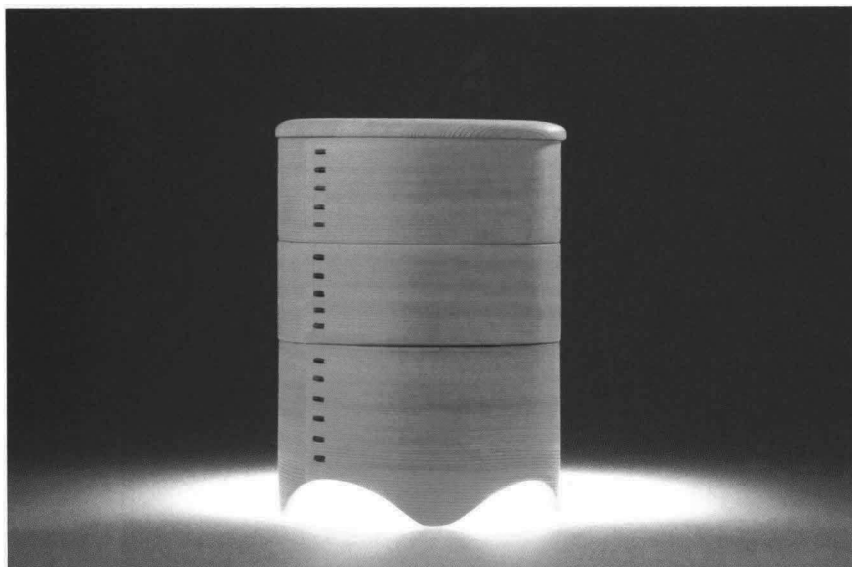


photo by Kenji KURATA

## 盆 BON

W210 D210 H55 / Japanese cedar / barks of cherry tree / natural finish / stackable / hand crafted

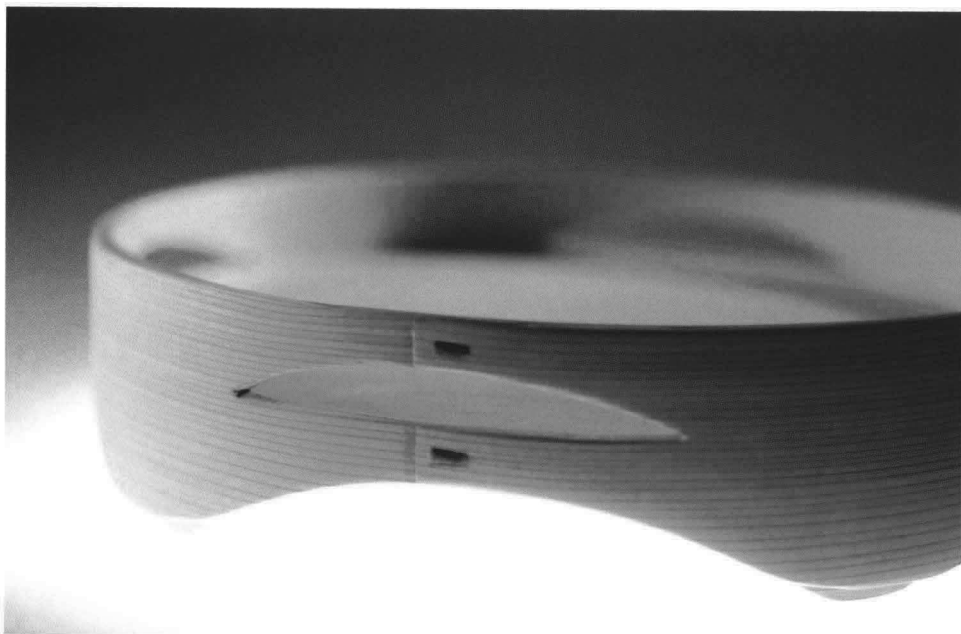
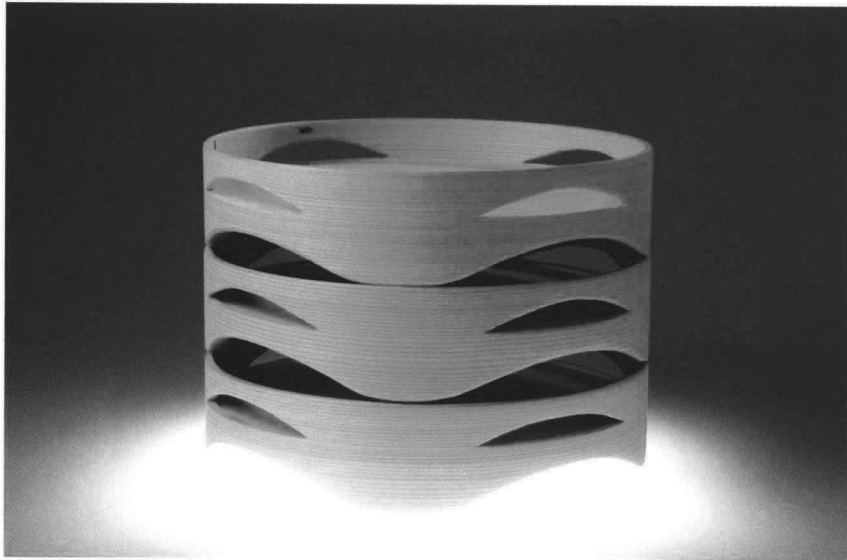


photo by Kenji KURATA

YOSHIMASA & YOSHINOBU SHIBATA

master craftsman



INTRODUCTION BY YOSHINOBU SHIBATA

The Magewappa of Odate is truly one of the most beautiful examples of traditional Japanese woodcrafts. Historically, Magewappa implements were used during the festivals at Ise shrine, while today it widely used in everyday life. It has been over 30 years since I started on the path to master the extensive techniques of Magewappa wood craft. Making the best use of 250 years old Akita cedar, I am challenging different processing techniques to create a new sense of design in the products I make. It would make me very happy to know that Magewappa products are useful to you in your life.

PERSONAL HISTORY-YOSHINOBU SHIBATA

- 1940 Born in Hinai-machi, Akita prefecture
- 1964 Began the pursuit of Magewappa
- 1984 Obtained : "Vocational Instructors Licence #9032"  
/ Received : "First Class Lacquerware Craftsman #2"  
Traditional Handicrafts Exhibition 10th Anniversary/ Tokyo Science & Technology Fair
- 1985 10th Annual Japan Traditional Handicrafts Exhibition
- 1986 11th Annual Japan Traditional Handicrafts Exhibition / MITI Life Industry Award  
1986 Japan Traditional Handicrafts Exhibition-Paris/ "Traditional Handicrafts Mastercraftsman #2861"
- 1987 12th Annual Japan Traditional Handicrafts Exhibition / Traditional Handicrafts Industrial Promotion Award
- 1988 Japan Industrial Promotion Assoc. Good Design Award
- 1989 Osaka Design Center Small & Medium Enterprise Award  
Japan Industrial Promotion Assoc. Good Design Award(household utensils section)
- 1990 14th Annual Japan Traditional Handicrafts Exhibition Traditional Handicrafts Industrial Promotion Award
- 1991 12th Annual Takashimaya Department Store Exhibition  
'91 Japan Design Competition in Ishikawa Exhibition
- 1992 Asian "Lacquer a cultured" / The origin an investigator in Sichuan China
- 1993 Asian "Lacquer a cultured" / The origin an investigator in Tibet / The world-wood crafts Exhibition
- 1994 18th Annual Japan Traditional Handicrafts Exhibition / Traditional Handicrafts Industrial promotion Award
- 1995 37th Recognized by the Japan Folkcrafts Association
- 1996 Asian "Lacquer a cultured" / The origin an investigator in Viet-Nam
- 1997 World of Magemono wood-craft tiny exhibition gallery open in workshop
- 2002 Special exhibition of international trade fair in Germany / Magemono wood-craft atelier in Switzerland